

【沫雪】あわゆき

泡のようにやわらかい雪、降ったばかりの新雪を沫雪(あわゆき)といいます。泡雪の字にも造ります。類義語の淡雪(あはゆき)は積もらずに消える雪、積もっても消えやすい雪をいいます。両者は語源的には別個ですが、発音・意味とも近く(万葉時代の「は」は「ファ」と発音)、時代とともに交差・混同・同化が見られます。

時代的には沫雪の方が古く、淡雪は『万葉集』には見当たりません。

『万葉集』で沫雪・泡雪は主に冬の雪、平安時代になると雪の柔らかさから消えやすさに視点が移り淡雪と表記して春の雪をいうようになります。王朝歌人は消えやすさ・はかなさの喩えとして詠むことを習いとしたようです。

鎌倉時代の『八雲御抄』では「沫雪は冬の初め」、淡雪を「春の雪也」とし、現代の歳時記では「沫雪」を冬の季語とするものは希で、「淡雪」を春の季語とし、沫雪・泡雪は淡雪の別字とするものが多いようです。

・沫雪のほどろほどろに降り敷けば奈良の都し思ほゆるかも『万葉集』大伴旅人
「ほどろほどろに」とは「斑に」という意味で、この歌の場合初雪を想わせます。

・卷向の檜原もいまだ雲みねば小松がうれゆ沫雪流る 『万葉集』人麻呂歌集
『万葉集』卷十所収のこの歌は冬雑歌に含まれています。

しかし、この歌を本歌とする、

・卷もくの檜原もいまだ曇らねば小松が原にあは雪ぞふる『新古今集』卷一
は春歌上に編まれます。時代による推移が見られます。

日本の自然美を「雪月花」と括ることがあります。いうまでもなく大和絵成立の昔から歌に絵に採り上げられてきた題です。この三つは形態としては移ろうもの、色としては白が基調である点に共通性があるのではないのでしょうか。

花も月も白くないぞと反論が起ころうかと思いますが、ここでいう白とは必ずしも絵の具の色としての白ではなく、月の陰としての色、花を代表する白梅・桜の清楚な色をいうのです。

雪は正に白を象徴する風物で、「雪のような…」という比喩はお馴染みですね。

空海の『文鏡秘府論』には雪に関する面白い記載があります。

この書には漢詩イメージ事典とでも言うべき記載があり、その「雪意」に雪の比喩の例があげられています。できるだけ口語でいくつかご紹介しましょう。

「月・朝焼け・夕焼け・柳の種子・梅・化粧粉・玉礫・瓊砂・瓊塵・玉砌・碎玉…」

瓊も玉も同義語で末尾の五つは細かな玉の粒のことです。漢詩の中で、これらが雪を喩え、時には喩えられるのです。

雪が玉の粒のように降る・積もるという表現は、雪の降る風景を仙界に見立てた表現と思われま

す。古来中国では雪は吉祥としての意味があったのです。

吉祥の雪といえば『万葉集』巻末を締め括る歌は家持の雪の歌でしたね。

・新しき年の始の初春の今日降る雪のいや重け吉事

(新年の初春の今日降る雪のようにいよいよ重なれよ、よい事が)

この歌に初めて触れたとき、私はリアリティーのない形式的な正月の挨拶に過ぎないと興味を覚えませんでした。

しかし、詩に呪術的効力を期待していた当時の言霊信仰を知ったとき、この歌には現代人に忘れ去られた古代的世界が読み取れ、評価は一転しました。

吉祥をもたらす雪の呪力を信じ、一年の吉事を振るい起こそうとする呪詞と受け止めると、歌の始原をも想わせる力が感じ取れます。

<http://www.morita-fumiyasu.com/>

~ Copyright (C) 2011 ~私の書齋~ 森田文康. All Rights Reserved.~